

# 本條の三味線で 蘇る古里の旋律

あす紀尾井小ホール

三味線演奏家の本條秀太郎「写真  
」が鄙(ひな) (田舎) で自然発生的に誕生  
した「うた」の民族的な躍動感や旋  
律をモチーフに現代の伝統音楽とし  
て蘇(よみがえ)らせた「第十回俵(たか)奏楽」のコン  
サートが十九日午後零時半と同四時  
半の二回、東京・紀尾井小ホールで  
開かれる。

本條は二十代のころから地方に残  
る民謡や民族音楽的なメロディーラ  
インを採取、復元し、三味線音楽の  
可能性を追求してきた。その結果、  
一九七一年に日本音楽の新しい流れ  
として俵奏楽が生まれた。これまで  
に三百曲以上を作曲し、日本舞踊な



どで多く使われている。

今回は本條が自ら作曲し、三味線  
音楽として確立した作品ばかりを集  
めた。

演目は昼の部が「みちのく鄙(ひな)酒(しよ)一(いち)曲(く)」に始まり、伊豆大島の「大島  
節」をフィーチャーした「椿慕情」、  
稲作を歌った「田歌」、本條の故  
郷、茨城・潮来をテーマにした「青  
芦の」、好きな作家だという泉鏡花  
の同名の作品に発想を得た「草迷  
宮」、富山県の立山を精神世界と現  
実世界の両面から見た「越中まんだ  
ら遙望」。

夜の部は「みちのく鄙(ひな)酒(しよ)一曲(く)」  
に、俵奏楽の十二月を干支(えと)として  
はめ込んだ「花の道」「田歌」、潮  
来の水の質感を表現した「通り雨」  
「草迷宮」「越中まんだら遙望」。

本條は「古典的な演奏では使われ  
ていないような奏法で自由闊達(かたかた)に演  
奏するのが俵奏楽の魅力。ぜひ楽し  
んでいただきたい」と話す。

五千円。傳燈樂舎「電03・330  
3・5180。」

(ライター・真壁聖一)